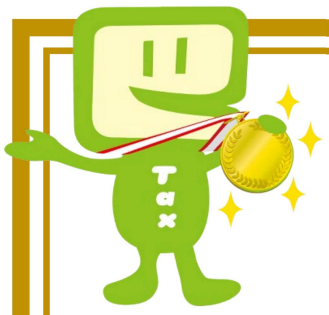


大阪国税局長賞

マイ・インフラ指定納税

神戸常盤女子高等学校　２年　中西　萌衣

以前の私は、税金とは自分の財産から徴収される負担であり損をしているようなマイナスのイメージを抱いていた。しかし今回の自主学習を通じて、税金とは救急車や道路、川の堤防といった公共インフラを維持するための「社会共通の費用」であると認識を改めた。もし税金が存在しなければあらゆるサービスが有料化され、お金がないと命の安全すら買うことができない冷たい社会になってしまう。そこで私は市民が税金の価値を実感し前向きに納税できる新たな制度を提案したい。

私が提案するのは、自分が納める税金の一部の使い道を市民が直接指定できる「マイ・インフラ指定納税」である。調べてみると現在道路一キロメートル舗装するのに約十億円、また川の堤防を作るのには数百億円という莫大な予算が必要だそうだ。この新制度では、スマートフォン等のアプリを使用し、自分が住む地域の「通学路への信号機の設置」や「危ない崖の防災工事」「老朽化した公園の道具の修理」など具体的なプロジェクトを選択して自分の税金の十パーセント分を自由に割り当てることができる。上限を十パーセントにすることで残りの税金は行政が計画的に配分し行政予算の安定性を崩さず新しい試みができる。

この制度のメリットは税金の使い道が一円単位で可視化され納税者としての当事者意識が生まれる点にある。これまではどこに使われているのか分からないと感じていた税金が自分の選択によって、近所の道路や防災設備といった形に変えることで税金が自分たちの命や生活を陰で支えている仕組みなのだとリアルに実感できるようになる。また行政も住民が真に危機感を持っている場所を正確に把握し優先して迅速に対策を講じることができる。

税金とは単なる義務ではなく、自分たちの手で理想の街を作っていくためのものである。今回、新しい税の仕組みを考えたことで税金は社会を維持するために不可欠な大切なシステムだと強く確信した。人任せにするのではなく一人ひとりが街のインフラや未来に関心を持ち、税金を通じて社会に投資していく姿勢こそがこれからの時代に求められてると私は考える。